

親子の友達関係は成立するのか

学籍番号 12022045 番 森岡千紘

指導教官 立木 茂雄

親子の友達関係は成立するのか

学籍番号 12022045 番 森岡 千紘

第1章 序論

第2章 先行研究

第1節 友達親子とは

第2節 友達親子への評価

第3節 季刊子ども学における友達親子特集

第1項 高度経済成長期後の家族の構造変化

第2項 長期化する親子のつきあい

第3項 郊外化が人間関係を友達化させる

第4項 高学歴女性の個人化

第4節 仮説

第3章 調査

第1節 調査対象

第2節 調査方法

第1項 F A C E S K G - 16(version2)を用いた家族システム評価

第2項 インタビュー

第4章 結果

第1節 F A C E S K G - 16(version2)を用いた家族システム評価

第2節 インタビュー

第5章 考察

第1節 楽しみを共有する友達親子

第2節 友達以上の親子

第3節 母親としての役割と友達としての役割

第4節 友達親子の行方

まとめ

参考

第1章 序論

私にとっての母はかつて母親という生き物であり、それ以外の何者でもなかった。母親はいつでもそばにいて、ときには優しく、ときには厳しく、私にたくさんのものを与えてくれた。私にとって母親は絶対的な存在であった。しかし幼いころの母親と現在の母親は別人に思える。今は母親というだけの存在ではない。人生の先輩であり、一番身近な女性であり、一人の友人である。

友人との会話の中で登場する母親の姿も権威的で厳格な母親としてではなく、一人の友人であるかのように語られることが多い。テレビや雑誌などでも、仲のよい母親と娘が洋服やアクセサリーを共有し、一緒に買い物を楽しむ姿が取り上げられるのを目にすることも多い。このような仲良しで気軽な親子の姿は一見友達のようにあり、しばしば友達親子と呼ばれる。友達親子は認められつつある反面、親は子どもに対して一線を引き、権威的であるべきだとの批判もある。その批判のなかで指摘される友達親子の背景に疑問を感じたのがこの研究の動機である。

友達親子に関する研究はまだ数が少なく、社会学的にも新鮮な題材であると考え。また友達親子の背景が語られるとき親の立場から語られることが多く、子どもの立場での研究をすることに意義があると考え。実際に友達親子であるという友人たちにインタビューをすることで友達親子の実態に迫り親子のきずなを明らかにした。

第2章 先行研究

第1節 友達親子とは

友達親子を言葉で定義することは難しい。家族のかたちが様々であるように、友達親子のかたちも多様である。ひとによってそのイメージするものは異なる。友達とは、対等な、友愛的価値に基づく他者である。夫婦関係、親子関係、兄弟関係などが友達のような関係で運営されているのが友達家族である。そのなかで親子関係に友達の類似性が見られるのが友達親子だ。友達親子にはどちらが偉くて、どちらが偉くないといった関係ではなく対等で気楽な関係である。言い換えれば、親が子どもに対して権威的に接するタテの関係ではなく、お互いが平等な友愛に基づくヨコの関係である。本論では友達親子を「親が権威的にではなく、対等な立場で子どもに接する親子関係」と定義する。

第2節 友達親子への評価

内閣府が2001年に実施した国民生活選好調査によると「あなたは、親子の付き合いも友人のような関係であってもよいという考え方について、どのように思いますか。」という問いに対して「全くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」と答えた人を友達親子肯定派とするとその割合は全体の49.2%にのぼり、「全くそう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた友達親子否定派の25.5%を大きく上回った。

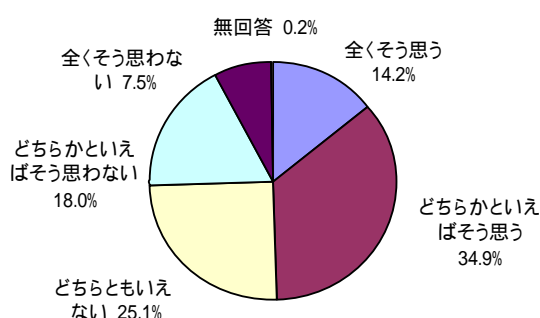


図1 親子の付き合いも友人のような関係であってもよいという考え方についてどう思いますか

(出典：内閣府，2001「国民生活選好調査」)

男女別で見ると男性で友達親子肯定派は47.1%であり、女性で友達親子肯定派は51.2%であった。このことから女性のほうが友達親子に肯定的であることが分かる。

また女性の年齢別では友達親子肯定派は20～24歳で65.2%、25～29歳で58.3%、30～34歳で52.5%となっており、年齢が若くなるにつれ友達親子否定派の割合が減り、友達親子肯定派の割合が増えている。

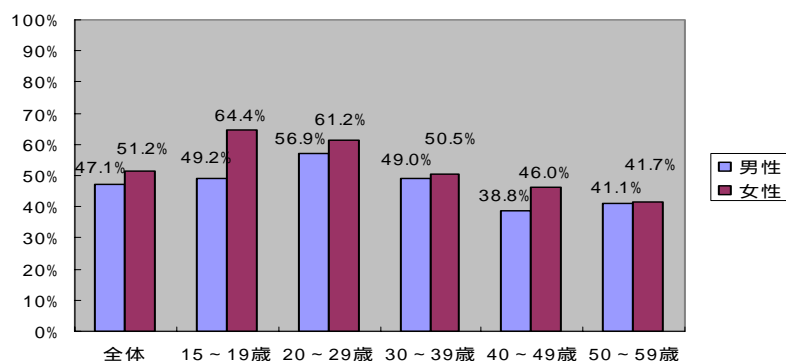


図2 性別、年齢別の友達親子肯定派

(出典：内閣府，2001「国民生活選好調査」)

これらの結果から友達親子に対する否定的考えはあるもの、徐々に友達親子が肯定されつつあることが分かる。

第3節 友達親子の社会的背景

1997年季刊子ども学冬号で友達親子の特集がなされた。この本の中では社会学者、心理学者、中学校教師、マーケティングプランナーなどがそれぞれの立場から多様な友達親子像を様々な観点からとらえている。

第1項 高度経済成長期後の家族の構造変化

『友達親子の社会的背景』を記した山田昌弘によると、友達親子が成立するためには豊かな社会の成立という経済的条件を抜きにするわけにはいかないという。友達である基本は広い意味での「遊び」にあり、このような友達関係を家庭内で作るには家族の中に、時間的、経済的に余裕が必要なのである。戦前の家庭では家族関係はまず労働組織であった。それゆえ友人的な関係が許される場ではなかった。親には労働組織のリーダーとしての権威があり、子どもは見習いとして親に従い、職業教育を受けたのである。(山田 1997)

戦後、産業の構造転換が起こり、農家や自営業が減少し、サラリーマン家庭が増える。夫 父は外で働き、妻 母は家で家事という分業型家族が登場する。家庭が仕事の場につれて、子どもも、家業の跡継ぎではなくなった。親にとって子どもは、基本的なしつけなどを除けば、生活の面倒を見、教育費を負担する対象でしかなくなった。(山田 1997)

ただ経済高度成長期までは男性(夫 父)は外で長時間労働に忙しく、女性(妻 母)は電化製品が普及していなかったため家事負担が重かった。夫婦とも経済的に豊かになることに忙しかったのである。その中での子どもの関係は世話やしつけや教育にかかりつきり、友人関係が成立するほどの余裕がなかった。(山田 1997)

石油ショック後、徐々に男性の労働時間が短縮し、週休2日制が普及する。女性は家電製品の普及で家事が楽になり、パートに出るようになる。その稼いだお金で、子どもを塾やお稽古事などに行かせる余裕ができる。基本的なしつけの終了後の子どもの教育部分は、家庭の外部に委託するようになる。(山田 1997)

親に時間的、経済的余裕ができ、家族が教育の場でさえなくなったとき、友達親子が成立する条件が整う。生活を共にするといっても、父は基本的に外で仕事、母は基本的に家事をする。教育は、学校に加え、塾などが受け持ってくれる。子どもにとって親は「お金

を出してくれる存在になりつつある。いまさら、親が子供に教えてあげられることはないのだ。となると、親子が実質的にコミュニケーションするためには、お互い「友人」になるしかなくなってきたのだと強調する。(山田 1997)

さら宮本みち子も『消費社会の友達親子 子どもはなぜ消費者になれるのか』において、なぜ子どもが大人と対等な消費者になれるのかを、家庭内での子どもの地位の変化という切り口で分析していく。宮本によると貧しい時代には、生活を維持するために個をおさえて家族の一体性を保とうとした。お金に関していえば、「入るを計って出るを制する」という言葉どおり、家族が一丸となって働き、それによって得られた収入はプールして蓄えることに主眼が置かれた。働くのは家族のためであり、収入を得たものはそれを家計へと出したし、それを不当とは考えなかったのである。(宮本 1997)

貧しい時代には、女性や子どもや高齢者は、家族の中で地位が低い。とくに経済的には不利な立場に置かれ権利を認められていない。かつて父親の夕食が一品多かったのは、限られた資源を家長に優先的に配分し、それ以外の家族員は我慢させられたからである。農家の嫁は最近まで、自由になるお金を持たないことが珍しくなかった。子どものおづかいや、自分の衣類を買うお金に困って実家からこっそりもらっていたという話は、中高年の思い出話である。農家に限らず、子どもは親を通して必要なものを与えられ、自分で買うことはめったになかった。また老人も、子ども(息子)に扶養され、自由になるお金はほとんどない状態が、年金制度導入の以前にはふつうであった。(宮本 1997)

彼らが労働力として価値がなかったわけではない。実際には、現代よりよほど働いていた。女性は家事だけでなく家業の重要な労働力であった。子どもも家事の手伝いやきょうだいの世話、家業の手伝いなどで役立っていた。若者が家業を手伝いつつただ働きに近い状態に甘んじていた時代も長かった。(宮本 1997)

これらは、家族としての経済(家計)に個人が埋め込まれた状態と表現できよう。消費というものが必需的なものに限られていた時代には、家族の経済は一つにまとめられていた。そのうえで家父長制という社会的な制度や慣習が、男に有利に配分することを後押ししたのである。しかし、高度経済成長期をへた後、家計の構造には変化が現れる。それは家計の個別化(これに「個計」という造語があてられた。)という現象である。(宮本 1997)

生活水準が上昇し、高校進学率が九割を超え、また大学進学率が最高を記録する一九七五年頃から、家族における子どもの経済的役割は目だって縮小し、やがて消滅に近い状態に達した。学校卒業後も、子どもは個族のために働く必要がなく、自分自身のため、そし

て結婚して家庭をつくる準備をするために働くようになり、子どもの収入は期待されなくなった。つまり、家計の個計化は子どもに依存を許すと同時に、経済力を持たせるようになったのである。その一方で、親は子どもに家庭内での責任や役割を負わせていない。つまり家事や家庭全体の経済に関わる役割を持たないまま、子どもは独自の経済力を持って消費社会に飛び出していく。親に扶養される期間が長くなっているのに、経済力を持っている、という表現は逆説と感じられるかもしれない。しかし、ここにこそ現代の子どもの特性がある。諸外国では近代以後、女性の社会進出や離婚家庭の増加に伴って、再び子どもの家庭内での役割や責任が発生している。日本でも同様の社会変化が起こっているにもかかわらず、子どもの役割は大幅には増加していない。家庭周辺でいかなる仕事も果たさなくなった子どもたちは、勉強と部活とレジャーで過ごしている。それにもかかわらず、子どもはなぜ親と友達のような関係を作っているのだろうか。その回答はひとえに、親が子どもにそれを許しているからである。親が子どもに与える経済援助によって、子どもは消費者として大人と対等な地位を許されている。消費者として、子どもは親と対等なのである。経済力を持つ子どもをしつけるにはある程度依存の状態にしておかなければならないのだ。友達親子とは一見対等だが、じつは一方的な供給と消費で成り立っている依存の関係である。なぜこのような親子関係が普遍的になっていったのだろうか。(宮本 1997)

その回答はひとえに親が子どもにそれを許しているからである。親にとって子どもは自己実現の対象だから子どもの自立を迫り子どもを手放すことはできない。豊かな時代の中で手塩のかけて育て上げようやく成人に達した子どもと友達のような楽しい関係を続けたいと夢見て進んで子どもを手元に置き続ける親が少なくない。そういう意味では親もまた子どもに対して心理的依存をしているといえるかもしれない。(宮本 1997)

このような親の気持ちを多かれ少なかれ子どもも察する。何より親の傘の下にい続けたほうが経済的に楽だし家事などの世話も受けられればあえて親の家から出ようとしない。経済基盤が危うくなっているのだから自立することは容易ではなく、結果として親の元に絡め取られてしまう。(宮本 1997)

第2項 長期化する親子のつきあい

長寿社会の親子関係の特徴は、聖人どうし押しでの関係が長期にわたって続くということにある。仮に人生 80 年と想定し、かつ 30 年目に次世代を得るとすれば、親子関係は 50

年間続くこのことになるが、そのうちの30年間は20歳以上の成人同士の関係である。人生50年とされていたほんの半世紀前までは、次世代をもう少し早く得たとしても、成人同士の親子関係はせいぜい5年程度と想定されていたのに比べれば、以下にその期間が延びたかが分かる。こうした成人親子関係期間の飛躍的な伸びは、ライフコースを通じての親子間の勢力関係と役割関係に少なからぬ影響を与えていると考えられる。

さらに山田によると長寿化によって生じる親の将来の不安が母親が娘に執着する原因であると述べている。長寿化によりケースによっては子どもが親に依存する期間よりも、親が子どもに依存する期間のほうが長くなるのである。長期的な人生を見据えたとき、子どもとよい関係を保てなければ将来見捨てられてしまうというリスクが生まれる。なにも、介護などの面倒を全部みてもらおうとは思ってはいなくても、老後、子どもがそばにいないのと、いないのとでは、心理的幸福度が違うだろう。ひと昔前なら、親の面倒を見るのは子どもの義務、舅・姑の介護は嫁がみるという規範が有効だった。それは、医療が未発達で、長生きする親が相対的に少数だったから可能だったのだ。今では、長生きする親が多くなり、その上に少子化で、世話する子どもは圧倒的に少ない。つまり、現在の経済的依存と将来の世話への期待が相対的に均衡しているから、見かけ上対等な友達親子が成立しているのだという。(山田 1997)

第3項 郊外化が人間関係を友達化させる

『郊外が生んだ友達親子 その歴史と可能性』を記した三浦展は「郊外の親子は友達にしかねない」と述べている。核家族の父親は遠距離通勤のため家庭で子どもと一緒に過ごす時間も少ない。加えて郊外では学歴志向が強いため、親は子どものご機嫌を取って勉強だけをさせようとする。こうした郊外の家庭での親子関係は、もはや「必要に応じて何かをするだけの関係」である。さらに三浦は、郊外はすべての人間関係を友情的にしてしまう性質があるという。なぜなら郊外は、互いに見知らぬ人々が異なる地域からばらばらに集まってきて住んでいる非歴史的な空間であるため、伝統的な地域社会に見られる地縁・血縁、あるいは年齢や職業に基づく支配関係、上下関係がないからだ。つまり、どんな土地から来た人もどんな会社の人もどんな年齢の人も郊外では一人の中流市民として平等になる。さらに三浦が強調するのは、郊外は「消費する子どもの天国」であるということだ。郊外の主役は、あくまで消費の主導権を握る主婦、それに次いで子どもになる。だが、誰のために消費するかという観点に立てば、子どもこそが本当の主役かもしれない。

父親はどう見ても主役ではない。脇役というほどでもない。ただのちょい役だ。こうして、消費という舞台の上で、主婦や親子の従来の関係が逆転するのである。そのような関係においては、ファミリーレストランでの食事、RV車で行くオートキャンプなどは、家族が家族であることを模索する「演戯」であり、土曜日の手巻き寿司やホットプレートでの焼き肉は、親子が揃ってコミュニケーションするための「儀式」に思えると三浦は言う。そうでもしないと現代の親子は自分たちが親子であることを確認できないのだ。(三浦 1997)

第4項 高学歴女性の個人化

『高学歴社会と友達親子』において庄司洋子は、女性が高学歴化したことが結婚・出産・育児のさまざまな面に影響を及ぼしていると述べている。相手を慎重に選びながらの遅い結婚は遅い結婚は、遅い出産につながり、結果的には少ない出産となる。さらに高学歴女性は高学歴男性と結婚したが、また実際にそうしているという「同類婚」の傾向が見られる。女性が自分と同等あるいはそれ以上の学歴の男性を選ぼうとすれば相手が限られ、特に高学歴化の進行中には、年齢が高いほど高学歴者は少ないから、女性がこれまでのように年上の男性を選ぶことが難しくなる。女性が同年齢や年下の男性を選ぶ確立は高くなり、「夫婦の友達化」が進むのである。子育てにおいても、少なく産んで専業主婦として育てるのが高学歴女性の典型的なかたちである。また高学歴の女性は働きたがらない傾向がある。しかし彼女らにとっての子育てとは、夫たちが身を置く高学歴社会とは対極のものである。こうした子育ての領域で、彼女らが学歴で差異化をはかろうとすることは難しい。こうした疎外感、友達であるはずの夫や、友達だった同世代の女性たちが、学歴という切符のおかげでそれなりにいきき働いているというのに、自分ばかりが子どもと共に閉じ込められていると感じるとき、いっそう大きくなるはずだ。庄司は友達親子は高学歴の専業主婦が遭遇する試練をうまく乗り越えるための戦略のひとつではないかというのである。高学歴女性には「家族の一員」であるよりも「個人」でありたいという意識が強く、また家族に対しても情緒面での期待が極めて大きいという。つまり彼女らは妻や母としての「家族役割」よりも、自分との心のつながりを確認できる「友達」的な関係を求めているという。(庄司 1997)

第4節 仮説

国民生活選好調査から分かるように、友達親子は若い女性を中心に肯定されている。し

かし学者による見解は厳しい。友達親子はお互い計算で取り入ろうとする装いの関係なのだろうか。経済力を持った子どもをお金だけの関係にしないため、友達としてふるまう。子どもが経済的援助を受けたいがために親に付き合う。仮に経済的つながりしかないのならば、この関係に果たして親としての権威を捨ててまで友達を演じる十分なメリットがあるのだろうか。山田が今のうちにご機嫌を取っていれば、将来見捨てられず、面倒を見てもらえるかと述べている。しかし友達親子だからといって面倒をみる保証はない。それほどに母親は子どもへ期待しているのだろうか。それほどに家庭に執着しているのだろうか。

また宮本は友達親子が晩婚者、未婚者の増加につながると述べている。しかし子どもはいずれは自立しなければならないことには気づいているだろう。親密性の強い友達親子だからいつまでも母親と密着したまま、結婚からは遠のいてしまうのだろうか。

また共通の文化は親が子どもに取り入るための手段であるかのようにしるされている。わざわざ親が自分に興味のない相手の趣味に付き合うのだろうか。子どもも親が本心でその趣味を楽しんでいなければ気づくのではないだろうか。

友達親子に精神的なきずなは存在しないのだろうか。経済の豊かさと共に家族の構造が変化し親子の力関係が対等になってきているのは確かであろう。しかし経済的な変化しか述べられていない。精神的变化が母と子を親密化させるのではないだろうか。

第3章 調査

第1節 調査対象

本論では調査対象を母親との親子関係を友達親子だと思ふ大学生の女子とした。友達親子の「親が権威的にではなく、対等な立場で子どもに接する親子関係」と定義した。しかしひとによってそのイメージは異なり、定義によって対象を絞りすぎると、偏った調査になってしまう可能性がある。そのため自ら友達親子であると思っていれば調査対象に該当するとした。

また母親と娘に焦点を絞ったのは友達親子の典型的な組み合わせであるからだ。近代家族では父親は影が薄い。また年頃の息子が母親と親密であれば、「マザコン」などと呼ばれあまりよく思われないためか、母親と友達親子になることは少ない。一方母親と娘の組み合わせは問題とされないのである。

さらに多くの場合高校生以下なら自分で収入を得ることが容易ではない。そのため経済的依存をしなければならないことが多い。しかし大学生になるとアルバイトによって収入

を得る機会が増える。したがって学費や生活費の面での依存をすることは多いが、そのほかの娯楽費などを親に依存するかしないかは個人が選択できる。以上の条件から 8 人を調査対象とした。

第 2 節 調査方法

第 1 項 F A C E S K G - 16(version2)による家族システム評価

友達親子の家族としての機能を客観的に計るために家族システム評価尺度である F A C E S K G を用いる。F A C E S K G は立木茂雄がディビット・ハーマン・オルソン (David Herman Olson) が 1979 年に発表した結婚・家族システムの円環モデルに準拠しながら、その項目はわが国の文化的・社会的コンテクストに沿うように独自に開発した質問紙である。オルソンらのグループはきずな (cohesion)・かじとり (adaptability) の量次元が家族機能を決定する上で中心的であると主張した。円環モデルではきずなを「家族の成員が互いに対して持つ情緒的結合」と定義される。円環モデルに使われている家族のきずなの定義は 2 つの構成要素からなっている。一つは家族メンバーを感情的に同一化させる側面で、家族のきずなの極端に弱い強い段階 (ベッタリ) としてあらわされる。もう一つは反対に家族の成員を家族システムから遠ざけようとする側面で、きずなの極端に弱い段階 (バラバラ) としてあらわされる。この 2 つの構成要素のバランスのとれた段階 (ピッタリとサラリ) で家族システムはもっともうまく機能し、個人の成長も促進される。

またかじとりの次元は円環モデルでは以下のように定義される。「状況的・発達のストレスに応じて家族 (夫婦) システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力である。この次元に関する具体的な変数は、家族の権力構造 (自己主張と支配) や交渉 (話し合いや処理) のスタイル、役割関係、関係規範などである」。もっとも健康な家族システムは、かじとりの次元の真ん中の段階 (キッチリと柔軟) に位置する。こういった家族は形態維持と形態変容の間のバランスが保たれている。

円環モデルはきずなとかじとりの 2 つの独立する次元がつくる空間上で、家族システムの機能度を診断評価する。家族がこの空間の中央部に位置されればそれだけ健康であると考えられる。逆に、きずなもかじとりも極端で、空間の辺縁部に布置された場合、問題が生じやすいと考えるのである。

表1 F A C E S K G - 16 (version2) の質問項目

概念	項目
かじとり	問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである 家でのそれぞれの役割ははっきりしているがみなでおぎないあうことがある 困ったことが起こったとき、いつも勝手に判断を下す人がいる 我が家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる 家の決まりはみなが守るようにしている 我が家はみんなで約束したことでそれを実行することはほとんどない 問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとれる 我が家では家族で何か決めても、守られたためしがない
きずな	たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある 子どもが落ち込んでいるときはこちらでも心配になるが、あまり聞いたりしない 悩みを家族に相談することがある 家族はお互いの体によくふれあう 家族の間で、用事以外の関係は全くない 家族のものは必要最低限のことは話す、それ以上はあまり会話がな 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある 誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんなで起きて待っている

第2項 インタビュー調査

インタビューではまず自らの親子関係を友達親子であると思うか尋ね、思うならなぜ友達親子であると思うか、また友達親子になった時期、きっかけを語ってもらった。

次に多くの先行研究で指摘されていた友達親子の経済的つながりを明らかにするため、買い物に焦点を当てた。先行研究が正しければ、娘は自分の欲しい物を母親に買ってもらうため、一緒に出かけるはずである。

買い物に加え、友達親子がどのような文化を共有するのかを知るため、親子間をつなぐ共通の趣味、興味があるかを尋ねた。この質問をするにあたってはその文化が相手の気をひき、取り入れるための手段となっているのか、それとも純粋に二人でその文化を楽しんでいるのかを読み取るように努めた。

次にこの論文の仮説である友達親子の精神的つながりを証明するために母親の役割、存在意義、位置づけ、親子関係の満足度についての質問を設けた。まず母親としての機能を果たしているのかを知るために、しつけや教育について詳しく話してもらった。そして母親は自分にとってどのような存在であるか、親子関係の満足度は高いのかなどを尋ねた。

最後に宮本が懸念するように友達親子は自立できないまま、未婚・晩婚へ繋がりそうな

要因を持っているのか調べた。

表2 インタビュー調査の調査内容と質問

調査内容	質問
自らを友達親子だと認識しているか	母親との関係を友達親子だと思いますか
	なぜ友達親子だと思うか
	いつから友達のような関係になりましたか
消費行動での繋がりがあるか	母親と買い物に行くことはありますか
	なぜ一緒に買い物に行くのですか
	買い物に行ったとき欲しい物を買ってもらうことはありますか
	親に経済的ゆとりがなくなっても友達親子でいられると思いま
共通の文化、趣味、関心があるか	服やアクセサリーを貸し借りしますか
	母親と共通の趣味はありますか
	母親とどのようなことをして過ごしますか
精神的な繋がりがあるか	母親とよく話をしますか
	どのような話をしますか
	悩みを相談しますか
	なぜ悩みを相談するのですか
	母親との間に遠慮や気兼ねはありますか
母親に親としての役割があるか	幼少期のしつけは厳しかったですか
	勉強について言われたことはありますか
	今でも叱られることはありますか
母親の存在をどのように位置づけている	あなたにとって母親はどのような存在ですか
	母親を尊敬していますか
	どのような点を尊敬していますか
	尊敬できない点はありませんか
親子関係の満足度は高いか	将来母親のようになりたいと思いますか
	今の親子関係に満足していますか
	どのような点で満足していますか
友達親子は自立できるか	不満な点はありませんか
	これから家を出る予定はありますか
	いつ家を出ますか
	結婚はいつごろしたいですか
	結婚後自分の親と同居したいですか
	結婚後親の近くに住みたいですか

第4章 結果

インタビューの内容を調査内容ごとにまとめ、F A C E S K G - 16(version2)の結果を質問項目ごとに記し、水準を当てはめた。また調査対象者はAさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさんとする。

表4 FACESKG - 16 (version2) 結果

概念	項目	尺度置	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
かじどり	問題が起こると家族で話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	0.5	X	X	X	X	○	○	○	X
	家でそれぞれの役割ははっきりしているが、みなで補い合うこともある	-0.5	○	X	○	○	X	○	○	○
	困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	-3.5	○	X	X	X	X	X	X	○
	わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	1.5	X	○	X	○	○	○	○	X
	家の決まりは皆が守るようにしている	-1.5	○	X	X	X	○	○	○	X
	わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	2.5	X	X	X	X	X	X	X	○
	問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見が通る	-2.5	○	X	X	X	X	X	○	○
	わが家では家族で何が決めでも、守られたためしがない	3.5	X	X	X	X	X	X	X	X
	総点 極点		-8	1.5	0.5	1	0.5	0	-2.5	-4
	水準		融通なし	柔軟	柔軟	柔軟	柔軟	キッチリ	融通なし	融通なし
きずな	たいがい各自好き勝手に過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	-0.5	○	○	○	○	○	○	○	○
	子どもが落ち込んでいる時はこちらも心配になるが、あまり聞いたりしない	-1.5	X	○	○	○	○	X	X	X
	悩みを家族に相談することがある	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○
	家族はお互いの体によくふれあう	3.5	○	X	○	X	○	○	X	X
	家族の間で、用事以外の関係は全くない	-3.5	X	X	X	X	X	X	X	X
	家族のものは必要最低限のことは話す、それ以上はあまり話さない	-2.5	X	X	X	X	X	X	X	X
	休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	0.5	○	○	○	○	○	○	○	○
	誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	2.5	X	X	X	X	X	X	X	X
	総点 極点		5	0	3.5	0	5	5	1.5	1.5
	水準		ベッタリ	サラリ	ベッタリ	サラリ	ベッタリ	ベッタリ	ベッタリ	ベッタリ

第1節 FACESKG - 16(version2)による家族システム評価

Aさんは「困ったことが起こったとき、いつも勝手に判断を下す人がいる」という質問項目の答えが「はい」であった。この勝手に判断を下す人はAさんの父親だそうだ。父親は教育熱心であり、幼いころのしつけは厳しく、父親の意思で塾にも通わせられ、中学校受験もさせられたと語っている。母親もある程度の厳しさはあったものの父親ほどではなかったという。家族のリーダーシップは権威的であったので「融通なし」と位置づけられたのである。さらにきずなの次元でもまた「悩みを家族に相談する」という質問項目に「はい」と答えている。しかし悩みを相談するのは母親のみであり、父親に悩みを相談することはないという。したがって「ベツタリ」という関係は母親との関係に限定される。厳しい父親の存在が優しい母親との距離を縮めるにあたったのかもしれない。

さらにGさん、Hさんもかじとりは「融通なし」である。きずなは「ピッタリ」であるのでAさんほどではないが情緒的結合が認められる。Gさんには門限があり、家族の決まりとして守られていたようだ。幼いころのしつけも厳しかったようである。GさんとHさんに共通するのは母親への尊敬心が強いことである。母親の性格的なものだけでなく、母親が若々しく、ファッションや美容への関心を忘れないことを共通してあげている。このような尊敬が母親への情緒的結合の強さの要因となっているのではないだろうか。このように尊敬し、信頼している母親であるからこそ、悩みを安心して相談している。さらに母親と趣味が似ていて、共通の趣味も多い。そのため「ピッタリ」としたきずなののである。

BさんとDさんはかじとりの水準が「柔軟」、きずなの水準が「サラリ」であった。この二人は』インタビューでも共通する点が多かった。二人とも他のインフォーマントに比べると自立心が高かったのである。結婚までに家を出たいと答えているのはこの二人だけであった。友達親子の特徴に行動を共にすることが多いことがあげられるが、この二人は他のインフォーマントと違い母親との共通の趣味はあまりないと答えている。Dさんは家にいるときも自分の部屋にすることが多く、一人で過ごす時間も大切にしているのであった。しかし友達親子であると認識しているのは精神的つながりがあるからではないだろうか。一緒に過ごす時間は少なくとも、母親とはよく話し、相談もする。いつも一緒にいるわけではない。しかし一緒に過ごすときは友達のような対等な関係を持つ。このようなドライな関係がきずなの親子間に明確な境界線が引けており、ある程度の親密さも兼ね備える「サラリ」という水準によく当てはまっている。

CさんとEさんはかじとりが共に「柔軟」である。きずながCさんは「ピッタリ」でE

「ベッタリ」であり、やや情緒的結合が強かった。Cさん、Eさん共に幼いころのしつけにおいてはマナーなどはある程度厳しかったが、教育の面では寛大で意思が尊重されていた。母親のことを信頼し、尊敬していて、何でも話すことができる関係である。さらに母親への依存心が強く、結婚までに家を出たくない理由に「母親と離れる寂しさ」をあげている点で共通していた。

Fさんはかじとりが「キッチリ」であり、きずなが「ベッタリ」であった。Fさんは勉強について注意されることはなかったが、マナーや行儀については厳しくしつけられた。きちんとしつけられたことが、今の自分にとってプラスになっているので感謝している。母親はいなくてはならない存在であり、感謝し尊敬する面が多いようだ。お互いの友人についてもほとんど把握していると語っている点からもきずなの強さが伺える。

このように友達親子といってもそのかたちは大きく異なる。それぞれの親子が、それぞれの考えを持っている。また友達親子であるからといって、家族としての機能が果たされていないわけではない。得られた回答からはかじとりが「てんやわんや」、きずなが「バラバラ」の親子はいなかった。権威的に接するのではなく、上下関係がないといわれている友達親子でも、しつけやきまりが全くないわけではないのだ。ある程度のきまりがあり、それが守られている。またきずなが「バラバラ」というのは友達親子と対極にあるものであるといえるのではないだろうか。友達親子のきずなは強いといえるだろう。「ベッタリ」の親子もいたが、「サラリ」の親子がいたのが意外であった。友達親子が必ずしも密着しすぎているというわけではない。距離をはかりながら付き合っている親子もいるのだ。

第2節 インタビュー

なぜ自らを友達親子だと思うか質問するとAさんは次のように答えてくれた。

「仲いいと思うし、よく買い物とか一緒に行くから。あとお母さんって感じがしない。敬うとか上下関係があるってわけじゃないから。友達みたいな対等な関係。」

友達親子だと感じる理由は仲がよく、一緒に出かけるというものが多かった。幼いころ「連れて行ってもらった」のとは異なりあくまで「一緒に出かける」というのである。またAさん同様にCさんもお母さんという感じがしないと語った。

また買い物という消費行動を全員が共にしていた。しかし先行研究のように買い物に行く理由に金銭的な援助を挙げているのはEさんのみであった。一緒に買い物に行く理由を尋ねたときEさんは以下のように答えた。

「一番身近にいて、気が合うから。友達より約束しやすいし。お母さんから誘ってくるなあ。服もお母さんと共有するから、一緒に買いに行った方が選びやすいし、お金もだしてもらえるしな。全額だしてくれるときもあるし、半分自分でだすときもある。」

母親に買ってもらうことはほとんどないと答えたHさんは理由を次のように語っている。

お母さんは、ファッションに興味があるんやけど店をあんまり知らんから、教えてほしいがるねん。だから、私が行く店に連れて行ってあげたり、教えてあげたりする。お互い服の趣味も似てるから、一緒に見てても楽しいし。似合うものをお互い見立てるっていうか。似合わんもんは似合わんってお互い遠慮のないアドバイスをし合えるし。あとは、気を使わず自分の行きたい店に行ってゆっくり買い物できるから行く。」

Gさんも買ってもらうために一緒に買い物をするのではないではない。

「お母さんと買い物に行くときは、朝から出発して一緒にランチをするねんけど、その時とかにいろいろ喋るのが楽しいから行くっていうのもある。お互い自分の予定もいっぱいあったり、家には妹とかお父さんがいてあんまり2人で話す機会っていうのが多くないから、お母さんとのコミュニケーションやなあ、私にとっての買い物は。友達やったら、自分の行きたい店ばかり連れまわすことはできへんけど、お母さんやったら気長に付き合ってくれるし、気を使わないでいいから。服の趣味がにてるから、お互いの行きたい店に行っても見てて楽しいし、お互いの服を見立てたりアドバイスしあったりしてる。私が、高校卒業した後ぐらいから、お母さんはファッションとか美容に懲りだして、私に流行とかを聞いてきたりする。もしかしたら、私よりもおしゃれ好きかもしれん。だから、刺激もうけるし。」

Gさんが母親と買い物に出かけるのは、気を使わなくてよいという母親ならではの理由とおしゃれで趣味が合うからという友達とも共通する理由を挙げている。Gさん以外も一緒に買い物に行く理由に、楽しい、気を使わず楽だと答えていた。買い物は買う行為だけが目的ではなく、同じ時間をすごすという目的もあるのではないだろうか。一緒に買い物に行く場所に多くがスーパーをあげていた。スーパーには娘が欲しいものはあまりないだろう。あったとしても自分で買えるほどのものだ。このことからスポンサーであるという母親像は感じられなかった。インタビューからは先行研究から浮かび上がったような消費のみで繋がった依存の関係を感じることはなかった。

買い物以外の共通の趣味についての質問では、共通の趣味を楽しんでいる姿が浮かび上がってきた。Eさんは次のように母親と同じ趣味を楽しんでいる。

「ハーブティーとかお茶を買ってきて、色々ブレンドして飲んだりとか。手作り石鹸を作ったり化粧水を作ったりしてる。そういうことが載ってる本も共有したりするしな。アロマオイル調合したり、スクラブとかゴマージュを作ったりもするな。お母さんは凝りだしたらとことんやる人やから。そういうところが、お母さんと似てるねん。ちょっと前は、パン作ったりしてた。パンを焼く機械も買ったからなあ。あとは、旅行によく行く。今度、お母さんと2人でエジプト行くし。温泉もいくなあ。お母さんの趣味が多いから。洋裁とかケーキ作りとか色々教えてもらえるねん。」

Eさんと母親の趣味は多彩であり、多くの趣味を楽しんでいるようだ。母親がEさんに付き合っているのではない。母親の趣味が多く、Eさんも教えてもらいながら楽しんでいるのである。

Eさん同様Aさんも以下のように語ってくれた。

「私家にこもってることが多くて、テレビ見るの好きやねんけどお母さんもテレビ好きやから、一緒に見ることが多いかな。ドラマとか、歌番組とか。お母さんの方が芸能人のことと詳しいから教えてもらう。お母さんはジャニーズ好きやねん。あとオダギリジョー。あとは読書も好き。推理小説とか話題本とか。読んで面白かったのを教えあう。」

Aさんの母親が好きなタレントは今若者にも人気のタレントである。ときに母親のほうが流行に敏感であるのだ。読書においても、読むように強要するのではなく、情報を提供しあっているのだ。母親が娘の趣味に合わせたり、無理して付き合ったりしているのではない。母と娘は趣味においても同じ楽しみを感じることができるのである。

Hさんと母親の趣味も共通している。

「ファッションと音楽の趣味が同じやな。ファッションは、一緒に買い物したりするし、音楽は、一緒にライブに行ったりするし、CDを貸し借りしたりするかなあ。あとは、お互いカラオケ好きやからよく行くし、お笑いも好きやからDVD借りてよく見るよ。」

このように気の合う親子は会話も非常に多い。Hさんの会話の内容は次の通りだ。

「お母さんから、仕事の愚痴をよく聞かされてるかな。お母さんは力仕事してて、体力的にもキツイ上に人間関係もうまくいってないみたいやから自然とそういう愚痴みたいなんが多くなるんかもしれん。私から話すことといえば、彼氏の愚痴が多いかな。お母さんの昔の恋愛の話も聞かせてもらえるから、つい自分の話もしてしまう。ちょっと恥ずかしいんやけどな。あとは、化粧品の話もする。どの化粧品がいいとか肌にあうかあわんかとか。」

Gさんと母親の会話は本当に友達同士の会話のようだ。仕事の愚痴を聞かせあう。お互いの恋愛の話も気楽にするのができる。恥ずかしさを感じるのは母親が相手だからかもしれない。さらにGさんは悩みも母親に打ち明ける。

「私は、昔から悩みでもそれ以外の話でも何でもお母さんに話してきたから、それが習慣になってるというか。お母さんは、私のことをよくわかってるから、私のちょっとした異変にもすぐに気づくから。だから、お母さんから、何かあったの？と聞かれて、そこから悩みを話し出すっていうこともある。お母さんは、自分の倍以上生きてるわけやから、アドバイスが欲しいときも私が納得できる言葉を言ってくれる。信頼できる。親やから、当然遠慮はないしキツイことを言ってきたりすることもあるし、そこから喧嘩になることもあるけどでも気づいたらまた話してる。あとは、私はマイナス思考でくよくよ悩みがちなんやけど、お母さんはプラス思考で「なんとかなる」が口癖のような人で、私が悩みのどつぼにはまる前に助け出してくれるからかも。お母さんと話したら、元気になれるから。将来の話をする人が多いかな。私は、将来的には福祉関係の仕事に就きたいと思ってるから、そのことについてよく話したりする。お母さんの友達に福祉の仕事してる人がいるから、参考になるし。悩みは、あんまりないからお母さんに限らずあんまり話さんねん。自分の中で答えが決まって、ただ話を聞いて欲しいときとかにお母さんに聞いてもらうってことの方が多いかも。自分が話を聞いてほしいって思うときに必ず聞いてくれる。友達やったら相手の都合あるしなかなかそういうわけにはいかんやん。あと、私とお母さんは性格や考えてることが似てるし、小さいときから私のことをずっと見てきてよくわかってるから、「あんたは、そういうところが昔からあるな、でもそれはあかん」という感じでの確にアドバイスしてくれる。私よりも物知りやし、人生の先輩やし。信頼してるし、私が話したら自分の事のように真剣に聞いてくれる。それと、こっちの悩みの度合いもわかってきて、アドバイスを欲しい時はくれるし、励まして欲しいときは励ましてくれる。ただ聞いて欲しいときは、共感して聞いてくれるし。こっちの気持ちをよくわかってきて自分がしてほしいことを何も言わんでもしてくれるから、楽やし安らげるからかな。」

Gさんは母親を深く信頼しているのだろう。母親だからこそ分かる、幼いころからの性格を踏まえたアドバイスは母親だからできるのだ。またGさんは母親を人生の先輩であるとしてとらえている。悩みを相談するのも、母親が一番身近で経験豊富な先輩からアドバイスを受けるためであった。

Fさんは母親ならではのよさを以下のように語っている。

「地元の友達の話をする事が多いかな。自分の仲のいい友達の話をする事が多い。内容的には、これもとりとめのない話が多い。行ったとか、と遊んできたとか、友達にこんなことがあったとか。お母さんは、だいたい私の友達はわかってるから、話しやすいし。地元の友達のことは、完全に顔と名前が一致してるからなあ。だから、地元の友達のことをいっぱい話すんかも。自分の性格をよくわかってくれてて、1個話せば10個ぐらい返ってくるものがあるから。話が通じやすいし、自分の気持ちをわかってもらえる。友達にも相談したりするけど、やっぱり友達は遠慮したアドバイスをくれたりとか、自分の味方になってくれることが多いけど、お母さんは客観的に見て私が悪い時もハッキリ言ってくれる。もちろん、私の話に共感してくれることもあるで。普段から、お母さんとよく喋ってるから、最初は全然違う話をしてても自然に悩みを相談していることが多い。」

母親なら遠慮せず本音で応えてくれるという信頼があるのだ。また母親になら本音で話しても嫌われないだろうという安心が感じられた。そういった面では友達より母親を信頼している部分もあるようだ。人生の先輩と認識するように母親を尊敬していることが伺えた。母親のどのようなところを尊敬しているか尋ねたところGさんは次のように語った。

「お母さんは、専業主婦なんやけど家族みんなが快適に楽しく暮らせるように常に考えてて。掃除も料理も洗濯もさぼらない。でも、家のことだけしてるのかっていうとそうじゃなくて、友達といろんなところ出かけて活動的やし、自分の好きなことにも夢中になってる。本当に、いつも元気でプラス思考で楽しそう。幸せやって堂々と言ってるお母さんを尊敬する。ファッションとか美容の話と一緒にできるぐらい若い女性としての気持ちを今も持ち続けてるところも見習いたいなと思うし。あとは、いざというときに頼りになるし、絶対私の味方でおってくれるっていう安心感がある。」

Gさんは家事をうまくこなし、活動的で、いつも幸せそうな母親を魅力的に感じ、尊敬しているのだ。母親として尊敬しているだけではなく、家庭だけに縛られず好きなことにも夢中になる一人の女性としても尊敬しているのだ。続いて自分が母親になったとき母親のようになりたいと思うかを尋ねた

「なりたくないと思う部分もあるけど、私にはまねできないなと思うことも多いな。あんなにテキパキ家事はこなせないし。でも家族の事を一番に考えて、愛情を注いでるところとか、いつも元気で明るいところとかは、あんな風になりたいなと思ったりする。でも完全にマネしようとは全く思わない。私は私やから。」

母親を尊敬しているからといってまったく真似しようとはしていないのである。あくまで母親は母親であり、自分は自分だ。

Aさんは母親と友達としてみなしているがゆえに以下のように考えている。

「のんびりしてて楽観的なところはいいと思う。けど本当に友達みたいに思ってるから尊敬とかの対象じゃない。友達っていいなって思うところはあっても尊敬とかじゃないやん。」

「(おかあさんのようには)なりたくはない。お母さんのことは好きやけど。お母さんは専業主婦で視野が狭い。でも私はもっと視野の広い人になりたい。」

Aさんにとって母親は友達のような存在であるから、母親の性格を客観的にとらえている。またHさんは次のように語っている。

「お母さんは苦労してるし、大変なことも多いのに明るく元気に生きてていつも前向きで、しんどいのを周りに見せない。それに、4人の子どもを産んで立派に育ててきた。そういうところは尊敬してる。性格は、おっとりしてるけど今も力仕事を続けてて根性がある。お母さんをずっと見てきたから、少々しんどくても頑張らなあかんと思える。あとは、女性として魅力的。いつまでも若い。おしゃれに興味があるし、きれいでいようと努力してる。そこも尊敬してるかな。」

母親は母親であるからといってかならずしも尊敬しているのではない。いつも近くにいてよく見ているから性格も分かる。母親の欠点を冷静に見ることができるのである。

母親はどんな存在であるかを尋ねたら、それぞれ答えは違うが娘にとって母親の存在がいかに大切に思っているか伝わってきた。

Fさんにとっては母親は次のような存在である。

「人生の先輩やったり、仲のいい友達やったり、偉大な親やったり...色々やけど、なくてはならない存在やな。いつも感謝してる。」

またHさんは次のように語っている。

「親友でもあり母でもあるっていう感じかなあ。難しいけど。何の遠慮もなく甘えたり頼ったりできる大きい存在。いなくなることは考えられへんし、考えたくない。自分が、大人になるにつれて、母から親友っぽくなってきたような気がする。お母さんは、私に關してはもう子育ては終わったって言ってる。あとは、妹だけらしい。」

と話す。

Iさんは次のように語っている。

「普段常に考えてるわけじゃないけどいつも心の奥におる。いて当たり前やからあんまり意識はしてないけど。」

Hさんは自分が成長するにつれて親友のようになってきたといっている。娘にとっての母親はFさんが話すように母親であり、友達であり、人生の先輩といったようにいくつもの役割を持っているのだ。

友達親子だからといって母親としての役目がないわけではない。しつけについて質問すると幼いころのしつけは比較的厳しかったようだ。Gさんは次のように語った。

「勉強に関しては、小学校のときよく宿題しなさいとか、勉強しなさいとか言われた記憶がある。でも、中学生からは、勉強しなさいといわれることがなくなった。なんでかはわからんけど。受験校は、高校受験のときは、お母さんにどこを受けるか相談したりもしたけど、最終的には高校も大学も自分で決めた。しつけは、厳しかったかも。食事のマナーとか箸の持ち方とか好き嫌いしたら起こられるから、何でも我慢して食べてたし。挨拶とか行儀もそうやし。お母さんは怒ったらめっちゃ怖かったから。今は、さすがに怒られることはないけど、昔は些細な事でよく怒られた。門限もしっかりあったし、それは守るようにしてた。もちろん嘘ついて破ったりすることもあったけど。」

Hさんも次のように語っている。

「おばあちゃんが農家やから、食べ物のことに関してはよく言われた。ご飯は残したらあかんとか、箸の持ち方とか、好き嫌いとか、食べ方とか。当たり前のことやけど、なかなか身につかんから言われて良かったと思う。勉強のことに関しては、宿題しなさいぐらいしか言われなかった。小学校のときは、私別に言われんでも宿題はやってたから、ほとんど言われなかった。勉強とかよりも、私は女の子やから、風呂・トイレ掃除とか食器洗い、洗濯、料理、買い物などを普段からやるようになってよく言われてた。お母さんが働いてたからかもしれんけど。でも、基本的には、親は口うるさくなかった。」

GさんもHさんも身に付けていなければ将来困るような、行儀、挨拶、食べ方などについては厳しくしつけられている。勉強に関しては、Gさんは中学生になるまでは宿題についていわれることがあったが、その後は注意されることはなかったという。このことから幼いころは娘が一人前になれるよう、母親としてしつけを施していたことが分かる。やはり幼いころは母親としての役割が大きかったようである。

このような親子関係への満足度は高いようである。Dさんは次のように話した。

「(満足)してるよ。中学のときは反抗期やったからあんまりうまくいってなくて、お互い

が理解できなかったけど、今はお互い認め合っとうまくやっていると。」

Dさんは中学生の頃は母親に理解してもらえず、うまく母親と付き合うことはできなかったそうだ。しかし一緒に出かけるようになって母親をかわいいと思ったという。心を開き母親と向き合う時間が増えたことで母親との関係が友達親子のようになった。母親と友達という対等な立場で向かい合い、認め合っていることに満足しているようであった。

しかしDさんはこのように満足しているが、このまま経済基盤を親に頼ったまま同居を続けることには抵抗を感じている。結婚までに家を出たいかという質問に対しては以下のように語っている。

「出ると思う。いつまでも頼ってたらみっともないと思うから。お金に余裕ができれば一人暮らししたい。」

Dさんは自立しなければならないという意識は高いようである。一方で心地よい母親との関係を保ったまま同居を続けたいという答えが多かった。Aさんは次のように語っている。

「ない。働く場所も絶対家から通えるところになるし、家にいるのが一番落ち着くから。寂しいし。」

またCさんも同様の理由をあげている。

「ない。家にいるの楽しいし寂しくない。母と離れたら寂しいと思う。働き出しても一人暮らしするほどのお金はないと思う。」

さらに「さんもほぼ同様の理由である。

「1人暮らしへの憧れはあるけど、1人は寂しい。自分の家、部屋、家族に満足してるし、あえて出て行こうとは思わへん。お母さんと一緒にいるのは楽しいし、この時間を大切にしたいなあと思う。身の回りの世話をしてくれるのはありがたいけどそれだけが理由じゃない。経済的にも厳しいしなあ。」

親との同居を希望する理由に母親と離れることの寂しさをあげているのは友達親子の特徴だろうか。母親との仲のよい関係をこれからも続けたいと考えているのだろう。さらに同居を続ける理由に経済的な問題もあげられている。親から完全に自立したいという考えはあまりないようだ。

このように友達親子が必ずしも自立心がないというわけではなかった。また経済的に依存するためだけに親との同居を望んでいるのではない。母親との関係をこのまま保ち続けたいという精神的な依存心も強いようである。しかし全員に結婚願望はある。そう遠くは

ない将来母親と離れなければならないことには気づいている。友達親子が必ずしも未婚・晩婚化につながるとは限らないのではないだろうか。

友達親子と一言でいっても、その関係は実に多様であった。先行研究にあげられているように、すべての友達親子が経済的に依存するために母親と友達関係を持っているのではない。経済的な依存心よりも、むしろ母親への精神的依存心の強さが感じられた。お金だけでつながった表面だけの関係にはとても感じられなかったのだ。どの親子にも歴史があり、確かなきずながあった。たしかに甘えはあるかもしれないがそれはお互いを信頼しているからこそ甘えることができるのではないだろうか。

第5章 考察

第1節 楽しみを共有する友達親子

消費行動を共にするという友達親子の特徴は全ての親子でなされていた。しかし買ってもらうために一緒に買い物に出かけるというわけではなかった。親子であるから気兼ねせず、気を使わないというのが共通の理由であった。また一緒に買い物に出かけることは親子のコミュニケーションでもあるようだった。つまり買い物を通して親子のきずなを強めているのである。買い物に行くというのはFACE SKG - 16(version2)でいうところの「用事以外の関係」である。これを含む「家族の間で、用事以外の関係は全くない」という質問に「はい」と答えた人はいなかった。このことから母親と娘の関係が家庭内にとどまらないことが分かる。また共通の趣味も「用事以外の関係」に含まれる。全ての親子ではないにしろ友達親子は共通の趣味を持つことが多い。共通の趣味としては家庭内で楽しめるものが多く、女同士で気の合う母と娘が気軽に楽しむことができる。母と娘が結びつきやすいのも女同士であるから、趣味や興味、関心が似ているからではないだろうか。消費行動を共にし、娘が母親にスポンサー的な役割を求めるために友達親子を装うのではない。買い物という消費行動は共通の趣味の一つであり、一緒に行動をすることによって同じ楽しみを共有することができる関係なのではないだろうか。

第2節 友達以上の親子関係

全ての親子において親子間の精神的つながりは大変強かった。FACE SKG - 16(version2)での「悩みを家族に相談することがある」という項目では全員が「はい」と答

え、「家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がな」という項目には全員が「いいえ」と答えている。「子どもが落ち込んでいる時はこちらも心配になるが、あまり聞いたりしない」という項目については答えが分かれた。このことから干渉の度合いは違うものの娘が母親に信頼を寄せており、悩みを相談することができる関係であるようであった。なぜこのように精神的つながりが強いのだろうか。母親は自分より長く生きている分、人生経験が豊富でアドバイスをしてくれる。しかしそれ以上に母親なら自分のことを一番よく分かってくれ、遠慮のない意見をくれるし、自分自身も本音で話すことができるという親子だからこそその利点があるようだった。友達ならばその関係は断ち切られることもある。しかし家族は切っても切れない関係であることから、母親になら裏切られることはないと安心しているのかもしれない。友達のようなことから何でも話せるということ以上に家族だから安心して話せるのではないだろうか。そういった意味では「友達以上の親子関係と言えるかも知れない。

第3節 母親としての役割と友達としての役割

母親が親としての役割を持つということはFACE SKG - 16(version2)のかじとりと深く関係がある。先行研究では親が威厳を失い、親としての責任が果たされていないことが指摘されていた。しかしインタビューからそれぞれの家庭には決まりがあり、母親は娘が世間に出ても恥ずかしくないようにしつけを施していることが分かった。FACE SKG - 16(version2)のきずなの水準では「てんやわんや」の親子がいなかったことから母親は母親としての役割を果たし、家族システムが円滑に機能していることが分かった。友達親子だからといって母親に友達のような役割しかないのではなく、母親としての役割もきちんと果たされていた。しかし成長と共にしかられることは少なくなったという意見もあるように、子どもの成長につれて、母親としての役割は次第になくなっていく。さらに子育てから開放され自由な時間が増えた母親は、仕事や趣味に目を向けるようになる。母親が女性としての一面を見せるようになったとき、母親としての役割が次第に友達としての役割に変わっていくのではないだろうか。母が家庭のことだけでなく家庭外にも目を向け、好きなことをしている姿に尊敬を寄せている。母親として尊敬する部分があれば、一人の女性としても尊敬していることが分かった。一人の女性として娘と接するとき対等な友達同士のような関係になるのではないだろうか。

第4節 友達親子の行方

友達親子の自立心の低さは先行研究で懸念されている通りであった。家を出たくない理由に母親と離れて暮らすことの寂しさを挙げている点は友達親子ならではあるかもしれない。友達親子は今の親子関係への満足度が非常に高く、家にいることに居心地のよさを感じている。この快適な暮らしから抜け出すことはできないと考えているのだ。しかしずっと家にいるつもりではなく、いずれ結婚すれば家を出ると考えている。それまではこの生活を続けたいと願うのは甘えかもしれない。しかし友達親子がみな自立心が低いわけではない。2人は金銭的に余裕ができれば家を出たいと考えている。

このような甘えが許されるのは親に経済的ゆとりがあるからである。しかしこのような経済的ゆとりはしだいになくなってゆくだろう。しかし今回インタビューをした友達親子には精神的なつながりが確かにあった。そのため経済的ゆとりがなくなっても友達親子が消滅することはないように思える。また友達親子として育った娘が成長し、子どもを持ったとき、友達親子は再生産されるのではないだろうか。

まとめ

調査から感じたのは娘が母親を母親としてみているのではなく、一人の女性としてみている部分があるということであった。Bさんは母親について話すとき、時々「あの人」と呼ぶ。またAさんの母親がジャニーズやオダギリジョーのことを嬉しそうに話す姿は、母親というより女性であるといえる。

幼いころはやはり母親としての役割が大きい。母親としての責任があるから、外に出しても恥ずかしくないように、さまざまなことを教えなければならない。しかし成長とともに、勉強は学校や、塾で教えてくれる。しつけも大部分は幼少期に終わっている。教えることのなくなった母親はお金だけの関係にならないために娘と友達に取り入ろうとするのだろうか。将来の面倒を見てもらうために今から娘のご機嫌をとっておこうとするのだろうか。決してそうではないと思う。インタビューから浮かび上がる母親は、それほど家庭だけには縛られていない。家庭のほかに楽しみを見出している。仕事に精を出したり、習い事をしたり、趣味に明け暮れる。母親の家庭だけではなく、自分の世界を持っている。だから娘には母親が魅力的に感じられる。逆に母親が家庭だけに縛られていれば、家庭は娘にも共通のものであるから新鮮さはない。別々の世界をもつからこそ、価値があるのだ。お互いに別の世界があるから向き合うことができるのではないだろうか。

また母親にとっての娘は自分の分身であり、大切に育てた宝のような存在である。母親としての役割を引退したからといって親子の関係を終えたくはない。娘も同様に感じている。母親は今まで愛情をかけて育ててくれた。母親はいつでも自分の味方であり、嫌われることはないという自信がある。そのため娘は安心して母親に甘えることができる。友達には言えない本音で語ることができるのだ。本音で語り、女同士で向き合うことができるようになるのだ。

さらに身の回りには一緒に楽しむことができる娯楽があふれている。テレビをみること、読書、買い物、ポーリング、ネイルアート、ダイエット、手作り、旅行、映画、料理。これらの趣味は世代など関係なく楽しむことができる。母親は若い娘と関わることで若者の世界をより知ることができる。このような趣味を通して母親は若々しくいることができる。お互いが発見した楽しいことを、教え合い、一緒に楽しむのだ。ときには娘が母親に教えることもあるのだ。同じ趣味を楽しむときは上下関係などなく、対等になる。こうして同じ時間を過ごすとき親子は友達のような関係になるのではないだろうか。

こうした友達親子な関係はこれからも続いていくだろう。しかし同じかたちで続いていくとは限らない。Fさんの言葉には友達親子の本音が語られているのではないだろうか。

「私が結婚したら今みたいにはできなくなるわけやし、今しかできへんことやから。たぶんお母さんもそう思ってると思う。だから、なるべくおれる時間は一緒にいたいなと思う。」

いずれは結婚し家を出るだろう。親の近くに住みたいとはいってもそれが叶うかは分からない。母親のそばで過ごせる時間が減っていついなくなるかもしれないのだ。今しかない時間を大切にしたい、そんな思いが友達親子には込められているのではないだろうか。友達のようなようではあるが、親子という簡単には切ることができないきずながあるのではないだろうか。

40 字 × 30 字

26 ページ

原稿用紙 57 枚

参考文献

- 三浦展，1997，「郊外が生んだ友達親子」『季刊子ども学』冬号
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘，1997，『未婚化社会の親子関係　お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣．
- 宮本みち子，2002，『若者が<社会的弱者>に転落する』洋泉社
- 森岡清美，1987，『現代家族の社会学』放送大学教育振興会
- 信田さよ子，1997，『一卵性親子な関係』主婦の友社
- 立木茂雄，1999，『家族システムの理論的・実証的研究　オルソンの円環モデル妥当性の検証』川島書店
- 渡辺秀樹，1997，「友達親子の社会的背景」『季刊子ども学』冬号
- 山田昌弘，1994，『近代家族のゆくえ　家族と愛情のパラドックス』新曜社
- 山田昌弘，1997，「友達親子が語られる背景」『季刊子ども学』冬号

参考URL

- 内閣府，2001，「国民生活選好調査」
(<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h15/honbun/html/15322c10.html> ，
2005.12.20)